

## 音声学から考える商標の称呼の類否 総整理第1回

弁理士 池山拓治

### 0. はじめに

このコラムも終わりに近づいてきました。今回から最終回まで、これまでの総整理をします。おいしいところだけをつまみ食いすることができますので、マニアさんたちも、それほどでもない方もお付き合いください。

### 1. 冒頭で音声学についての基本的な前提となる知識について簡単な説明をしました。

音を発する基本的な構造については、重要な器官として声帯が挙げられます。声帯振動を伴う音はピッチアクセントをコントロールできることから、日本語における人の知覚に大きな影響を及ぼすものです。ですから、

「相違する音が濁音(ガ、ザ、ダ、バ行音)、半濁音(パ行音)、清音(カ、サ、タ、ハ行音)の違いにすぎないとき等においては、全体的印象が近似して聴覚されることが多い。(審査基準十(2)(ア)②)」  
という審査基準の記載には疑問があることを述べました。

### 2. 濁音の定義

声帯に関連して、濁音を考察する必要がある、濁音には2つの定義があることを述べました。

- ① テンテンがついた仮名の音
- ② 声帯振動を伴う音

です。一般的には①と考える人が多いのですが、音が文字によって定義されることについて違和感がありますし、音声の理解のためには②ととらえることが有益です。

### 3. 音声の検討単位

発声の省力化等のために、同化等が生じ、語中の一音のみを抜き出すことが不適切なパターンについて述べました。一連の流れの中の音を検討してこそ意味を持ち、一音のみを抜き出すと、「弱音とは(中略)、声帯が振動せずに発せられる音(フ・ス)等の聴覚上、明瞭でなくひびきの弱い音をいう(審査基準十(2)(イ))。』

などという誤った結論にたどり着くことになります。

### 4. サウンドスペクトログラム

音声解析のために、音声を可視化したものです。スウェーデンで開発された Wave Surfer もありますが、オランダで開発された Praat がよく用いられます。音声の解析には、主観的要素が入り込むことがあり、客観的な分析であるサウンドスペクトログラムが有用です。

念のために申しますが、『NHK 日本語発音アクセント新辞典』(NHK 放送文化研究所)を引用するのは不適當な場合があります。それは、

=====

「本辞典の目的は、『放送で用いるのにふさわしいことばの発音・アクセント』を示すことである。」

<https://www.nhk.or.jp/bunken/research/kotoba/>

アクセント辞典改訂専門委員会

=====

等と記載されているからで、引用すべきは共通語か標準語かを誤らないようにしたいものです。

## 5. アクセント

アクセントとは語の発声についての決まり事のこと、狭義のアクセントは高さアクセント(ピッチアクセントや高低アクセントともいう)と強さアクセント(ストレスアクセントや強勢アクセントともいう)にわけられます。音声認識される3要素である音質、大きさ、高さの一つであるピッチアクセントが日本語共通語のアクセントです。ピッチにより語の意味に違いを生じさせることを声調といい、日本語共通語は高低のいずれかのみ2段階型声調です。

また、語の識別において、ピッチパターンが優越する場合があります、その具体例は

①「病院(びょういん)」と「美容院(びょういん)」

②「自由(じゆう)」と「銃(じゆう)」

です。①については、病院の「びょ」と美容院の「びよ」の識別より、語が有する高低のピッチパターンの方が優越して知覚されます。

②についても同様で、自由の「じゆ」と銃の「じゅ」の差より、ピッチパターンの優位で認識しています。ピッチパターンの認識は日本語の知覚と切り離せません。

## 6. ピッチの発生源と知覚

ピッチアクセントは声帯振動によってコントロールされ、周波数で計測し、単位はヘルツ(Hz)です。

## 7. 聞こえやすい音と聞こえにくい音

同じ条件で発せられた音は一様に聞こえるのではなく、聞こえやすい音と、聞こえにくい音があり、その度合いを示す一般的な指標は「聞こえ(sonority)」で、条件が同じ音がどれだけ聞こえるかを音毎に考察したものです。聞こえを順に並べた聞こえ順(sonority scale)についての説明は注意点が二つあります。

① sonority については、数多くの研究結果が報告されていますが、すべてが絶対的なものではない。

② 音は前後の音の影響を受けることから、同じ音は常に同じ区分に位置するとは限らない。

しかし、絶対的ではないとはいえ、普遍的であると思われる scale 法則があります。

① 母音 > 子音

② 広母音 > 狭母音 > 子音

③ 広母音 > 狭母音 > 有声子音 > 無声子音

④ 広母音 > 狭母音 > 鼻音 > 有声子音 > 無声子音

称呼が相違する音において、隠微な音の相違より顕著な音の相違の方が大きいといえます。

## 8. 音の違いと意味の違い

音が異なると意味が異なる場合と、音が異なっても意味に違いを生じさせない場合があります。「かがく」は「化学」や「科学」等として、「かがく」は「雅楽」として認識されます。このように、意味の違いを生じさせる音の違いを音声学では「対立」といい、違いを生じる状態を「弁別的」といいます。

一方で、「カンボジア」「ポーランド」「韓国」「スーダン」「フランス」の国名中の5つの「ん」の音はすべて異なるものの、一般的には同じ音であると認識されます。このように、サウンドスペクトログラム等で解析すると客観的には異なる音であるけれども、違いを認識しない音を「異音」といいます。音声学的には異な

るものの、音韻論的には同一音素である場合があり、物理的な音声異なる場合であっても、それが認識されず、同一のものとして知覚されることがあるということですから、物理的な音の相違は知覚に影響を及ぼさず有意ではないということです。

以上